

保育者の学びあいを核とする大学における地域の 保育文化創成の取組（その1）

Emerging Process of a Study Group of Early Childhood Educators and Researchers for
Learning Together as a Part of Local Culture Pt.1

秋山麻実* 高橋英児* 新野貴則** 小島千か**
AKIYAMA Asami TAKAHASHI Eiji NIINO Takanori KOJIMA Chika

要約：2019年度にY県内すべての保育・幼児教育施設の保育者を対象として呼びかけ、本学教育学部主催の「探索保育研究会」を発足した。発足にあたって、2017年度からの2年間にわたり、本学教育学部附属幼稚園、本学教員、私立幼稚園、保育所、認定こども園数園の協力のもと、施設の垣根を超えた実践研究会がどのような効果をもつことを期待できるか、開催にあたって課題は何かといったことを洗い出すための研究会を行った。本論文は、この研究会発足に至るまでに、レジヨ・アプローチから着想を得た要点を整理するとともに、この準備期間についての報告を行うものである。

1. はじめに

2017年より文部科学省では、「幼児教育の推進体制構築事業」を開始し、「幼児教育アドバイザー」の育成・配置や地域の幼児教育の拠点となる「幼児教育センター」の設置等により、地方公共団体における幼児教育の推進体制を構築する」方針を打ち出している。教育委員会に指導主事を置くことによって、教育課程や生徒指導等について、校長・教員に対して指導と助言を行うシステムが構築されている小学校以上の学校階梯と異なり、保育・幼児教育の領域においては、幼稚園・保育所・認定こども園等の施設の管轄省庁がそれぞれ異なるだけでなく、義務教育でないこと、私立園の多さなどから、システムティックに一定の内容を伝達・指導する体制はこれまで構築されてこなかった。それに加えて、幼稚園と保育所では保育時間や対象年齢、養育の位置づけの差など、隣接領域でありながら差異が強調されてきた。教員・保育士（以下、両方を指すときには保育者とする）がともに実践を語り、互いに学びあう文化は、長く民間教育研究の分野に任されてきたといえる。

しかし、民間教育研究は、園の文化や地域によって影響を受けながら、個々の保育者が参加不参加を決めるといった偶然性に依存するところが少なくない。また、全国規模の学習会において情報や意見を交換することも大切だが、地域にねざし、文化を共有しながら、「顔の見える」関係を築いて学びあうことによって、保育だけでなく、地域社会のあり方を考える機会も、保育者にとって重要である。その意味で、地域の実情に則した保育者の学びの場が求められている。

そうした試みのひとつとして、2019年度に筆者らは、山梨大学教育学部主催「探索保育研究会」を開始した。本論文は、その準備段階として2017年度より2年間の試験的な研究会を行って得られたいくつかの知見についての報告である。具体的には、上記のような地域にねざした保育者の学びの機会の必要性の根拠を、レジヨ・アプローチを手がかりに論じる部分と、2017年より県内保育・幼児教育施設の協力を得て、試験的に開催した「探索保育研究会」準備としての研究会についての

* 幼小発達教育講座 ** 芸術身体教育講座

説明の部分とで構成されている。この試験的研究会は、芸術教育を専門とする本学教員2名、教育方法学を専門とする本学教員1名と幼児教育学教員1名が構想し、本学教育学部附属幼稚園の全面的な協力を得てスタートした。2019年度からは、Y県および同県教育委員会の後援を得て、同県保育協議会・私学教育振興会・認定こども園設置者連絡会との共催で「探索保育研究会」を開始した。

2. 枠組みとしてのレッジョ・アプローチ

イタリアのレッジョ・エミリアにおける乳幼児教育「レッジョ・アプローチ」が、子どもたちの主体性と対話、そして創造性を重視した教育であることはつとに有名であるが、それを実現するために「ペダゴジスタ」および「アトリエリスタ」という役割が重要な構成要素となっていること、また「ドキュメンテーション」と呼ばれる保育記録をもとに、話し合いによる保育のふり返りと計画作成が不可欠であることも、すでに各所で指摘されている^(注1)。

「ペダゴジスタ」は、教育学もしくは心理学を修め、一人につき数園を担当する。各園内の話し合いに参加して、児童理解や保育計画の相談にのったり、アドバイスをしたりすると同時に、園とともに保育研究を進める。「アトリエリスタ」は、芸術系の経歴を持った者が、子どもたちの自由な発想に基づく創造を実現するために、さまざまな道具やアイデアの提供、問いかけを行う。いずれも、現場の保育者と共に、しかし保育者とは異なる視点をもって、保育に関わる役割である。

ペダゴジスタは、レッジョ・アプローチに則って園や保育者を対象にアドバイスをするという意味で、システムとしては日本の「指導主事」と類似して見えるかもしれない。しかし、レッジョ・アプローチの重要な要素は、ある統一された保育方法やプログラムを現場の保育者が実現するところにあるのではない。レッジョ・アプローチの核は、主体性と対話であり、自律的であると同時につながりを持つことにある。このことは、子どもにとって大切にされているだけでなく、社会に関わる「政治的な選択」である。

社会にとって、学校や我々教師が、子どもたちに、独創的な考えを、学校文化のなかで正しいとされているスキームでもって急いで狭めることなく、考えるためのスペースをそれだけ残していることは、重要です。子どもたちに、他の人とは違うアイデアを持つことを、私たちはどれだけ支援しているのでしょうか。そして私たちはどれだけ子どもたちに、彼らの意見をクラスメートたちと議論し話し合うことに慣れさせているのでしょうか。私は、最終的にできたものよりもプロセスに着目することが、子どもたちやティーンエイジャーたちの独立した考えや戦略に対して、私たちがもっと敬意をもつための助けになると確信しています^(注2)。

上記は、レッジョ・エミリアで1970年よりアトリエリスタを務め、レッジョ・アプローチの核の一人となったヴェア・ヴェッキのことばである。ここでは、レッジョ・アプローチにおいては、子どもたちが個々に異なる主体であり、対話するということがすなわち主体の尊重であるということが表現されている。これは、一つの結論や答えへと誘導される学校のみならず社会や人間のあり方への批判であり、たんなる教育方法や内容にとどまるものではない。

こうした社会や教育のあり方、大人の子どものまなざしへの批判は、レッジョ・エミリアにおける保育者のあり方にも反映されている。2016年4月に筆者がレッジョ・チルドレン主催の国際研究週間に参加した折、保育者が自ら、世界中から集まる参加者の前で、自分たちの実践について報告し、子どもたちと保育者のことばからその評価を行い、いかに子どもたちの世界が豊かに広がったかということについての実践報告を行った。そのときに報告した保育者は、その発表を「私

たちの研究（research）」の成果と呼んだ。このことは、保育者が自らの保育について構想し、子どもたちとの対話によって世界が広がる実践を模索し、その結果について自分たちで考えること自体が、実践研究であり、保育者は同時に実践研究者であると自覚していることを示唆している。同研究週間において幾度も、子どもたちと保育者はともに「研究者（researcher）」であることが強調され、いくつかのアイデアについて検討したり、フィールドを歩き回って見たり、深く調べたりすることを「探索（exploration）」と呼んでいたからである。

これらのことばは、互いに支え合って、従来の用語法から意味合いを変えている。「研究者」は単なる職業あるいはワークの従事者を指すことばとして通常使うが、レッジョ・アプローチにおいては、自分の関心を表現して、探究する自由を行使する者という意味合いが付与される。一方「探索」は、通常、単に広くあるいは深く何かを追求することを意味するに過ぎないが、ここではそうした行為が学びを支え、人の間に対話を呼び起こし、それらを子どもや大人の権利として意識しながら認識を深め、創造を促すものという意味で使用される。

こうした状況を考え合わせるとき、ヴェッキのことばが意味するところは、自身の考えをもち、自身のことばで語り、それをもとに他者と議論することが、子どもたちの教育指針であるだけでなく、保育者を含めたレッジョ・アプローチに賛同する園とその保育者全体の課題であり、社会のあり方および市民として社会に参加する人間の生き方に深く関連するきわめて政治的な選択だということにあるといえる。「ペダゴジスタ」の役割をこの文脈において考えると、それは議論、あるいは「対話」を通じて共に「研究」をする立場、ということになる^(注3)。

現実的な文脈においても、これは「政治的」な選択である。レッジョ・エミリア市では、このような人間像、社会像を前提とする教育方針を、現在、市立の乳児保育所と幼児学校だけでなく、私立の保育施設やNPO等の賛同施設が採択している^(注4)。レッジョ・エミリア市立の園全体でこうした保育方針を採択しているということ、つまりそこに税金を投入しているということは、これが地域社会の承認事項として一定の機能を果たしていることを意味する。もちろん、それに異を唱える自由は個人にあり、レッジョ・アプローチに賛同しない園も存在している。そうした状況を鑑みると、レッジョ・アプローチの採択は、市による政治的選択と捉えることができるだろう。

こうしたレッジョ・アプローチの世界中への広まりは、二つの側面を見せている。ひとつは、レッジョ・チルドレンと呼ばれる教育研究のネットワークや展示・学習センターの設置と運営などをつかさどる組織が、レッジョ・アプローチの学習や、そこにヒントを得た研究交流などを促進している。その業務のなかには、筆者が参加した国際学習週間なども含まれるわけだが、参加者のなかには、レッジョ・エミリアの保育施設の方法や内容にヒントを得つつも、これまでの教育方法や、教育効果が分かりやすいさまざまなプログラムの上に、園内の広場、美しい空間や自由遊びの時間を付け加えるというかたちをとらざるを得ないという実情を語る者も多かった^(注5)。レッジョ・アプローチを、園全体の、あるいは地域全体の政治的な選択として捉え、それに刺激された（Reggio Inspired）うえで、自分たちなりの主体的で対話的なコミュニティとしての園や地域を模索していくということは、今日、多くの困難を伴うことがうかがえる。

翻って日本の状況をみると、地域社会が、ある種の教育理念や方針について賛同するという政治的な選択は、現実の行政システムにおいても考慮せざるを得ない。幼児教育振興プログラムの策定や、上述の幼児教育センターの設置など、地方自治体に期待されることは、本来であれば地域の文化や社会、経済、産業、歴史等さまざまな背景に合わせ、また何よりも重要なことは、地域住民の合意による、ある種の教育的価値の選択なしには、形骸化するからである。にもかかわらず、そうした行政の仕組みが、政治的な選択を前提とせざるを得ないことは、ほとんど明示されておらず、見かけ上の中立が求められているという現状も多く存在する。

本論文で紹介する取り組みは、以上のようなことがらに着想を得て、構想された。

大きな目標として、保育者が主体的で対話的な実践研究をできる場、そして園長・所長同士や保育者同士が顔の見える関係を構築できる地域社会で、私たちがどのような保育を選択するのかということ話し合い、研究する場を醸成することを設定した。具体的に、主体的で対話的な保育者の研究の場とするためには、研究者の呼びかけがきっかけとなるとしても、参加者が主体的に参加し、何をどのようにする場なのかというコンセプト自体を提案し、内容を変えていける場としなければならない。

そこには、所属や立場を超えて、誰でも保育に関心のある人が参加できるようにする必要があった。そして、「主体的・対話的で深」く考え、行動する権利を子どもに保障すること、発言や思考・行動の主体として他者に認められ、充実や幸福を感じる権利を子どもに保障するためには、どの大人もまた、そのような経験をする権利が保障されるということも、重要な要素であった。そして、保育研究を成立させるためには、どのような実践や記録を持ってきたとしても、「研究者」として自身の実践を語り、振り返る機会を持ち、他の参加者が学びの糸口をそこに見出す場が必要である。

一方で、保育実践や豊かさ、美しさ、面白さおよび子どもの主体性や創造性を探究するためには、少なくとも芸術系の専門家によるアドバイスがいつでも受けられる必要がある。

こうした発想から、2017年4月「探索・発見・創造・共同に基づく地域の教育文化創造プロジェクト」会議を開催した。

3. 仮立ち上げと準備

以下は、2017年度の活動記録である。

2017年4月25日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所1園 大学研究者4名
5月22日	参加者国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者4名
6月30日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所1園 大学研究者4名
8月20日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所1園 大学研究者4名
11月7日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 研究生1名 大学研究者4名
2018年2月13日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 研究生1名 大学研究者4名
3月28日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者4名

研究会の立ち上げにあたり、以下の文章を共有した。

「趣旨

このプロジェクトは、教師・保育者と研究者の共同的学びの集団を形成し、それを軸に地域の教育文化を創造する教育研究プロジェクトです。原則として、探索・発見・創造・共同を原理とした教育・保育活動と、教師・保育者・研究者の学びのあり方を模索していきたいのですが、こ

の原理については、プロジェクトのなかで見直していければと思います。

当面の活動は、以下の通りです。

①異なる園（や学校）の教師・保育者・研究者が共同で実践研究をすること

②それを通して、山梨でどんな子どもたちを育てていきたいかを考えること

③異なる園（や学校）の教師や保育者が、どうしたら楽しく、かつ意義のある研究を進められるかを模索すること

この三つが、私たちの当面の目標です。これを通して得られたことを

④既存の研究会・研修会等に反映すること

⑤子どもたちが元気に育っていることを、社会にアピールしていくこと

また、地域社会と子どもたちのかかわりを見直していくこと

これらが、その後の課題となります。先生方には、自分たちの保育を考えながら、地域の教育・保育文化を作る核となっていたいただきたいと思います。

さらにふたつのことがらがあります。

⑥大学あるいは大学院が、地域の教師・保育者の研修にどのように関わっていけるかを研究すること

⑦国内外の保育者・保育関係者と交流すること

※ただし、特に⑤と⑦については、予算の都合による。

※3年くらいをめどに、発展的解消の仕方を考える。

このプロジェクトは、レッジョ・エミリア市における乳幼児保育および学校教育の取り組みに触発されています。特に、「探索」し「創造」することが、学ぶことにつながるという発想と、子どもの育ちのイメージを保育・教育関係者のみならず地域社会で共有することが、私たちが大切だと思う保育を守るためには不可欠だということ、そして教師や保育者が実践を「研究」として語ることの価値を、もっと高めなければならないということの三点において、このプロジェクトはレッジョ・アプローチに影響を受けています。

一方、レッジョ・アプローチの意義は、それを学んで取り入れることではなく、私たちが自分たちの保育・教育を作るといほとんど一点にかかっているといえます。

以上を踏まえて、この会の当面の計画を以下のように考えています。

①学習・・・レッジョ・エミリアの保育の見直し／レッジョ・アプローチを取り入れているプロジェクトについての学習／探索・発見・創造・共同を原理とする教育・保育イメージの共有→見直しへ。

②実践検討・・・各園における戦略／教師・保育者の保育実践・記録・検討。

③園見学と課題の共有や検討。

④本会の記録・・・実践検討を教師・保育者の学びと研究のプロセスとして捉え、検討のドキュメンテーション（記録）を残し、そこで見出される成長や意味をあとづけ、共有し、教師・保育者が多様な考えや発想の探索を楽しむことによって積極的に学び、研究できる話し合いの方法を明らかにする。また、大学における教員・保育者の研修のあり方について検討する（研究者）。」

4. 準備年度の内容と結果

2017年度には、レッジョ・アプローチについての基本的な情報の共有、海外の保育実践研究の記

録の読みあいなどを行った。

11月以降は各園の実践報告をすることになったが、最初は「運動会」というテーマで各園が記録を持ってくることになった。その結果、他園の実践を聞く機会を参加者がこれまであまり持っていなかったこと、ひとつのテーマで実践を持ち寄ることで比較ができるが、一回の研究会としては分量が多すぎるということがわかった。

そのため2月からは、各園の持ち回りで実践報告を行うことになり、これを年度をまたいで2018年5月まで続けた。その結果、園の環境、記録の書き方、着眼点などの違いが見えてきた。また、子どもの見方などについて、話し合いを深めていくことができるようになってきた。たとえば、以下のような話し合いが行われた。

（2018年5月10日記録より）

保育者A：耕す子は、体格のいい男の子とか、計算とか絵が苦手とか。看板チームでピーマン描く子がいなかった。話したら、ふたつかくよ、とってくれた女の子がいた。

苗や種を買いに行くというのは、お金を介して社会と出会うことが面白いのかも。

副園長B：うちの園で畑で収穫したものを売る八百屋さんをやった時には、大きいのは2個、小さいのは3個で、というのを見てきた子がいた。広告を描いて、看板もかいて、公平じゃなくちゃいけないというのを知っていく過程がよかったと思う。秘密基地の（ためのお金を得るという）目的があったから真剣に取り組んだのかも。お家の人も、このかぼちゃ熟れてないと言われるなどのクレームが来た。面白いな、と思った。園外とのつながりも考えたが、子どもたちと話したら、外に売る前に、園全部に売りたいけれど、数えて、足りないから年長の組だけ、となった。

園長C：この前拾った1000円。結局ユニセフに寄付することになった。うまい棒買うとか、色々出たんだけど、全部1円玉にして、重さをはかったりした。結局出した結論が、谷川俊太郎の『ともだち』を読んで、ユニセフに。郵便局で振り込んだ。お金って、うまい棒にもなれば、人のために、にもなる。お金って、園でもやらなくていいのかなと思う。どうなんでしょう。

教員D：お金に限定すると難しくなる。保育の過程で植物が枯れてもいいというのと一緒に、ごっこだとスムーズにきれいに稼げる。学びは、何かのトラブルがあって、それを解決しようとする過程で生まれるはず。あぶく銭を拾って、どうしよう、というなかから学びが生まれる。今日の報告は、トラブルを避けようとしている印象がある。今のお金の話を聞いたら、これはシビアな問題だ。

教員E：日本の保育は、お金の問題をオブラートに包む。海外だと就学前からマネー・リテラシーを高める、という保育もある。子どもたちも一人の市民として、というところがある。リアルにお金を扱う。どこに焦点を当てるかで異なる。

副園長B：子どもを赤ちゃん扱いしているような気がした。子どもは子どもなんだから、という線引きをされたような気がした。D先生の言った、お金の中にリアルなトラブルが起きてくるっていう感覚が大事。トラブルとアクシデントが大事なキーワードで、それをなんとかしたいと思うところに、対話が始まる。保育者はそこを避けたいけれど。それは対話的で深い学びにもつながる。

保育者A：子どもに聞いても、・・・という感じになることも多くて、教員からの発信が多かった。そのさじ加減を悩みながらやった。

園長F（保育者A所属園）：読んだ時、とんとんとん行っている印象を自分も受けただけれど、スペースの関係で成長がどうなるかを何も与えずに好きにどうぞ、というのもおかしいと思う。卒園しちゃうし。声掛けたときに悩んだ。

ここでは、子どもを「子ども扱い」することの是非について触れることが、単なる観念的な問題ではなく、社会とのつながりとしてのお金の問題や、活動の計画や進行を誰がどのような判断で立てていくのかという極めて現実的で具体的な課題として語られる。そのなかで、子どもは子どもなりに真剣に取り組んでいることがあり、見てきているものがあること、彼らの経験を生かす話し合いや計画作成が、子どもを成長させることが指摘されている。

また、自身の園で起こったこと、悩んだ場面のほかに、報告された保育について最初に抱いていた印象と、話し合いを通して変わってきた視点が表現されている。

さらにここで着目しておきたい点は、「対話的で深い学び」という観念が、トラブルとアクシデントという日常を契機にしているということ、話し合いの中で共有していることである。「対話的で深い学び」が、計画されたプログラムだけでなく、それを崩す瞬間とも関連づけて捉えられている。

こうした充実した自由な話し合いが行われる一方で、一回に提出する記録が大部になることも、研究会の課題としてあがった。記録を書くことが苦手な保育者がいるだけでなく、通常の保育に加えて大部な保育記録を用意することは大きな業務負担となる。また、検討を進めるときに、あまりにボリュームのあるものを検討するには、話し合いの技量が必要となったり、話題が拡散することも、指摘された。

2018年度の研究会では、2019年度から本格開催をするための話し合いに多くの時間を割いた。2018年度の開催回数と参加者については、以下の通りである。なお、大学教員については、2018年度より新規赴任および育児休業からの復帰により、幼児教育分野担当教員2名の新たな参加を得た。

5月10日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学教員5名
7月5日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学教員6名
8月23日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者6名
11月8日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者6名
2月15日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者6名
3月27日	参加者 国立幼稚園1園 私立幼稚園1園 幼稚園型認定こども園1園 私立保育所2園 大学研究者6名

2018年度の会議は、2017年度のふり返りとともに、2019年度から全県の保育者に呼びかけて実践検討の研究会を開催するにあたり、目的、形態、既存の研究会と比較した位置づけについて話し合いを重ねるとともに、具体的な検討資料に基づくシミュレーションなどを行った。その結果、次の事項が確認された。

- ① 開催日時は、幼稚園では比較的早い時間でも対応できるが、保育所は保育があるため、遅い時間の方が良いという意見と、勤務時間内の研修に置き換えられるため、遅すぎない方が良いという意見に分かれた。結局、一年間の予定をあらかじめ固定することによって、どの園でも前もって対処できる、というところを結論とした。
- ② 開催回数は年に6回とした。

- ③ 互いに批判的になったり、観念的な話し合いをすることが、管理職やベテランの保育者にとっては興味深いということが確認された。そのため、研究会を2つのコースに分けることにし、記録の書き方や話し合いの仕方などを一から学び、短い記録を持ってきて、自身の保育の見通しや希望を持てたり、楽しかったことや良かったことを確認できる「宝探し」コースと、まとまったプロジェクトの記録を持って来たり、もう少し保育を変えるためのヒントを得たい、時には深く観念的な話や社会、保育のあり方について話し合いたいという参加者のための「宝探し」コースを立てることになった。
- ④ 他の園と知り合いになり、保育の話をしたり、互いに見学にしあったりすることができる関係ができたことがよかったので、そういった場として活用できると良いという意見が出た。
- ⑤ 名前は、「探索保育研究会」とする。
- ⑥ 子どもがどのように育っているのかということ、小学校への接続も視野に入れて、ことばにする努力を重ねていくことも、大きな課題の一つである。

5. 結果

以上が、探索保育研究会立ち上げまでの2017年度、2018年度の報告である。

主体的で対話的な保育者自身の実践研究とその文化を醸成するということを目標に、保育者や保育関係者が自由に保育について語り合う場、自身の保育について「研究」として自信をもって報告し、それについて考えあうことで「研究」を深めていく場として、探索保育研究会を立ち上げるというプロジェクトであるが、主として2018年度に行った2019年開催までの準備の中で、次の問題が見えてきた。

第一に、参加者が研究会の方向性を決めるということについての心もとなさである。この研究会の目的は何か、何を追求するのかということが何度も話し合われた。保育についての話し合いの深まりが見えても、それをもって研究会の「成果」として感じることには、限界がある。リーダーを必要とするのか、あるいは現場の保育者が結論を導き出していくのかという点が判然としないまま、探索保育研究会が始動するという事になった。

第二に、話し合いの方法を学ぶという目標は、比較的分かりやすいことは確認された。多くの研修会において、記録の書き方や発言の仕方に自信のないまま、自身に課された回のみ、義務感から記録を書いて持って行くということが多々ある。そうした状況への何らかの解決策として、記録の書き方を身につけ、楽しく話し合いをする方法を理解していくというニーズがあることは確認された。

第三に、既存の研修では多くの場合テーマがあらかじめ決定されており、自由なテーマ、自由な記録をもとに話し合う場としての意義はありそうだとすることも確認された。一方、誰にとってそうしたニーズがあるのか、そのニーズをどこまで共有していけるのかということが課題として見えてきた。また、幅広い層の保育者による自由な参加を保障すること、保育実践を継続的に検討することによる研究の深まりをどのように両立させることが可能かということも、検討課題として確認された。

6. 終わりに

保育者、研究者、保育関係者が共に、探索的な主体であり、対話し、尊重され、学び合う仲間となること、そのなかで地域社会における保育のあり方を探っていくことを主眼として、探索保育研

研究会発足前までに、多くの方々のご協力を得て、準備をすることができた。本論文では、その段階の経緯を紹介し、得られた結果を報告したが、引き続き、2019年度に探索保育研究会が開始してから明らかになったことについては、稿を改めて論じたい。

(注¹) C. エドワーズ、L. ガンディーニ、G. フェアマン編『子どもたちの100の言葉ーレッジョ・エミリアの幼児教育ー』世織書房、2001年。同書では、レッジョ・アプローチのプログラムの特徴を説明する章を、これら三つの要素のためにひとつずつ割いている。

(注²) Dahlberg, G and Moss, P., 'Series Editor's Introduction: Invitation to the Dance,' Vecchi, V., *Art and Creativity in Reggio Emilia*, Routledge, 2010, p. xviiより、筆者翻訳。

(注³) 事実、1972年に *Èquipe pedagogico-Didattica*（教育協力支援チーム）がレッジョ・エミリアで設立された時、その2年前からの構想に基づき、その構成メンバーはペダゴジスタと心理学者だったのであり、1970年代の保育研究、例えば環境構成と子どもと大人の生活に関する研究は、彼らにアトリエリスタや芸術家を加えて、保育者と共に行われたのである。Cagliari, P., Castagnetti, M. (eds.), *Loris Malaguzzi and the Schools of Reggio Emilia : A Selection of His Writings and Speeches, 1945-1933*, Routledge, 2016, p.155, p.161

(注⁴) Dahlberg, G and Moss, P., 'Note on Reggio Emilia Terminology,' *Op. cit.*, p.12.

(注⁵) 例えば、筆者が同学習週間中に会った幼稚園教員 Jen Whitman は、タイの International School Bangkok の幼稚園部から参加しており、2017年に筆者が山梨大学ータイ・コンケン大学研究交流プログラムの一部として同校を見学した際には、小学部とのカリキュラムの接続が綿密に規定されているが、その一方で、毎年レッジョ・エミリアの国際学習週間に1名の教員が派遣されるとの説明を受けた。

本論文は、文部科学省科学研究費補助金「社会構成主義に基づく探索的・主体的・対話的な保育者の専門性向上に関する研究」（2019年度 基盤研究(C)）（採択番号19K02640）の交付を得て行った研究成果の一部である。